

明るく住みよいまち
それは一人ひとりの人権が
大切にされ、
誰もが明るく幸せに
生きていくことが
できるまちです

未・来・に・向・か・っ・て

ふるさと

No.56

2025（令和7）年
10月1日発行



▲菊池市戦没者追悼式



戦後80年。今、私たちにできること～新たな誓い～



昭和初期を生きた私の祖母は「当時是不況下で、みんな生活に追われ、必死に働いていた。戦争は、遠い国で起きている出来事のように感じた。」と話していました。しかし、最初遠くに見えていた戦争は、やがて家族を巻き込み、身近な人の命を奪い、暮らしを壊していきました。祖母は「戦争の悲劇を繰り返さないためには、人権を守ることと生きることが、矛盾しない社会をつくることこそ大切だ」と伝えてくれました。今年は、戦後80年目の節目です。証言をとおして、戦争と家族、暮らしの記憶をたどりたいと思います。

（地域人権教育指導員 中原 博昭）

紙面紹介

- 1 ページ 私の戦争体験
「早逝した姉と兄を思い続けた母のこと」
- 2 ページ 厚伯父さんの自叙伝「碧空」のお話
- 3 ページ 平和を守ることは戦争の事実を知ること
(菊池(花房)飛行場の戦争遺産を未来に伝える会)
第21回菊池市人権・同和教育研究大会
(大会報告)

編集・発行

菊池市
菊池市教育委員会
菊池市人権・同和教育推進協議会

リーフレットに関するお問合せは

菊池市役所総務部人権啓発・男女共同参画推進課まで
TEL 0968-25-7209（直通）

私の戦争体験 「早逝した姉と兄を思い続けた母のこと」

泗水町にお住いの上田敦子さんにお話を伺いました。敦子さんのお母さんは、戦後長くふところに一片の紙片を忍ばせておられました。それは19歳で亡くなった長女静子さん（敦子さんにとっては長姉）を偲ぶ長男三千穂さん（同 長兄）の詩が書かれた紙でした。

亡き姉を偲びて初七日に作る
宝田三千穂（十八歳）

「思ひ出」
霞ヶ浦の波音に
哀れを含む今日この日
軍務ある身の野辺送り
吾捧げなん一哀賦
天なる姉よ来たり享け
天なる姉よ来たり享け
天なる姉よ来たり享け

（六連詩の中の第六連）

初七日…故人が亡くなった日から7日目に執り行う法要。
野辺送り…葬儀における儀式の一つ。
葬儀が終わった後に故人を火葬場まで送ること。
賦…古代中国の韻文における文体の一つ。転じて、詩や歌詞を作ること。

姉の静子さんはその当時小学校の代用教員でした。結核に侵され19歳でその短い生涯を終えられます。そして兄三千穂さんは当時予科練で学ぶ飛行兵。若くして逝った姉を偲ぶ少年飛行兵の心情が切々と歌われていました。18歳にして書かれたそれは語彙と表現力の豊かさに驚かされる詩でした。

三千穂さんは、この後ソロモン諸島におもむき、フロートのついた水上偵察機で来襲する敵機を追いはいらひ駆逐艦「秋風」を助けるという大戦果を挙げられます。しかし、その後戦死。その詳しい様子は家族には伝えられなかったとのこと。つまりこの詩は、お母さんにとって決して忘れられない二人の子の面影をよみがえらせるものだったのです。紙片はすり切れボロボロになっていました。おそらく何度もふところから取り出し読み返されたのでしょう。そして涙を流されたのでしょう。

後日、この詩に感銘を受けられた知人の方が曲を付けられました。敦子さんの娘さんが歌われ録音されたものを聞かせていただきました。やさしく美しいメロディでした。この紙片を胸に抱きながら戦後を生きたお母さんの心情が思われ、涙を禁じえませんでした。

*

話の終わりに敦子さんが言われました。

「今も戦争があっています。テレビに出てくるやせ衰えた子どもたちを見ると『まだこんなことが…』と胸が締め付けられます。平和について・命について語り続けていかなければと思います」

大切な家族が戦火の中で亡くなり涙にくれる人がいまもいる…過去を忘れてはならないと深く胸に刻んだ2時間でした。



▲お話をいただいた敦子さん(左)と妹の笠淑子さん(右)

あつし

へき くら

厚伯父さんの自叙伝「碧空」のお話

～中尾勇二さんが母校の子どもたちに伝えたいこととは？～

1944年、終戦の前の年に、当時小学3年生だった中尾一敏さんは、近所のお兄ちゃんが戦闘機に乗っているという話を聞いていて、戸崎小学校の真上を、日本の戦闘機（彗星）が轟音をたてて2～3回旋回して、東の方へ飛んで行ったという話をよくしていました。

その戦闘機に乗っていたのが、中尾勇二さんの伯父さんである中尾厚さんでした。

＊

なか おゆう じ

中尾勇二さん（菊池市在住）のお父さんの兄さん（あつし伯父さん）は19歳で海軍に入隊されました。勇二さんは小さい頃から、あつし伯父さんが戦闘機に乗っていたことや、戦場に行く直前に、あつし伯父さんが通った戸崎小学校の校庭の上空を戦闘機で飛行されたことなどを聞かされていました。

数年前、地域の区長として携わった勇二さんは、戸崎小学校を訪れた際、小さい頃に聞かされた話と出会い直しをされます。それが、一冊の本「碧空」です。

この本には、あつし伯父さんが経験されたことが綴ってあります。例えば、海軍に入隊した時のことや大空へ飛び立った時のこと、戦地で思う家族や故郷のこと、そして、思い出の校庭を飛行した時のことなどを自叙伝として、親戚や身近な方々だけに配られていたようです。

勇二さんはあつし伯父さんのことをこう話されました。

「あつし伯父さんは、戦争から帰還し、無事にふるさとに帰ってきました。戦争中は、海軍航空隊として、戦闘機に乗りながら、生と死のはざまを経験していたそうです。周りの多くのなかまが命を落としたり、自分の命も危なかったりしたこともたくさんあったと聞いています。そして、戦争が終わって40年以上過ぎたころ、これまで家族にも話したことのなかった戦争の時のことを突然、部屋にこもって文字にしまとめたそうです。これは、きっと思い出したくないことや辛かったことも後世に伝えるための本づくり（自叙伝「碧空」）ではなかったかと思います」

その後、勇二さんは区長をしているときに、戸崎小学校の校長先生と話をする中で、「ぜひ、子どもたちに、この本のことや戦争と平和について話していただませんか？」という言葉に背中を押され、修学旅行から帰ってきた六年生に向け話をする機会をもたれたということです。その学習では、自作のプレゼンテーションで子どもたちに話をされます。



▲「碧空」と戦闘服で仕立てた
こども服を持つ勇二さん



▲学校で小学生たちに話す勇二さん

一番伝えたいこととして、

- ①私たちの身近なところで悲惨な戦争があったことを忘れないで
- ②悲しい、暗い時代があったから今の平和な時代があること
- ③学校や家庭、近所の人たちとお互いに平和の尊さ、命の尊さを話し合って！

と話されました。

最後には、「武力ではなく、お互いが協力し支えあうことが大事で、戦争によって失われる命や破壊される故郷を考えれば、いくらお金がかかってもいいから友好的に国同士が向き合うことがこれから求められるんじゃないでしょうか」と結ばれました。

「平和を知ることが戦争の事実を知ること」

～菊池(花房)飛行場の戦争遺産を未来に伝える会～

事務局長の勝又俊一さんにお話を聴きました。

「幼少期から菊池飛行場の跡地は遊び場で、戦争の爪痕が沢山残っていました。小学生の頃『戦時中は、先生が生徒に対し戦争に行き来いと言っていた』と、当時教師だった父親から聞いていて、戦争を支持していた父親に不信感を持っていました。家に遊びに来る父親の友だちは、みな兵隊で戦争が身近にありました。(勝又さんが) 菊池南中学校勤務時に、菊池市の文化財保護員になり、特に飛行機を調べてほしいと、委員長から要請をうけました。当時の飛行機を調べ、プラモデル作りを通して日米の飛行機の構造と力の差を知りました。さらに、泗水町役場で最大の地図を購入し、ウォーキングメジャーを用いて実距離を測定し正確な地図とジオラマを作成しました」。そのジオラマは、勝又さんが当時の生徒たちとともに作成し文化祭で展示したもので、今もミュージアムに大切に展示してあります。

「戦争の証言者が、高齢のために亡くなっていく状況下で、戦争遺跡を若い人及び後世に伝えたいのです。まず、地元の歴史を知って欲しいのです」という強い思いが勝又さんの活動の原動力になっています。さらに活動を広げ、「地元の小中高校に働きかけて、紙芝居の制作や飛行場の表札作りなど行ってきました。森林組合に材料を依頼するなど地域との連携も大事にしています」と語ってくれました。

インタビューの途中でも、見学者が訪れるとさっと席を立ち説明に余念がありません。この菊池飛行場の戦争遺産とミュージアムには、近隣の小学校や高校から児童生徒たちが学習に訪れ多くの事を学んでいます。価値ある戦争遺構を後世に残すべきだと一市民として強く思いました。



▲菊池飛行場ミュージアムで説明する勝又さん

差別のない明るいまちづくりのための

第21回菊池市人権・同和教育研究大会

大会報告

第21回菊池市人権・同和教育研究大会は、2025年7月26日(土)に菊池市生涯学習センター等市内10会場にて開催されました。

人権啓発講演会では、「『差別をなくす』から『手をつなぐ』へ～ルーツを大切に自分らしく生きる～」と題して、自身も被差別部落出身で「社会的包摂のまちづくり」に携わる(一社)タウンスペースWAKWAK代表理事の岡本工介さんおかもとこうすけに、アメリカで出会った現地の人々との交流など、自らの半生の経験を交えながら、「自分のルーツに誇りを持つ」とはということかについて、お話をいただきました。



▲分科会でのレポート報告の様子

岡本さんはまず、部落差別の始まりから丁寧に説明され、「差別する人がいるから、自分のルーツを誇れない人がいる」、「今は寝た子がネットで起こされる時代」とし、「思いやり」では差別はなくなり、社会の仕組みや構造を変えていくことが必要であると語られました。

講演を聴いた参加者からは、「だれもが当たり前に生まれた場所を誇れるように人権感覚を日々みがいていかなければと思いました」などの感想が寄せられました。

分科会では、地域の各団体等から人権に関する取組の提案が行われ、それをもとに協議が深められました。参加者からは、「団体活動について聞く機会はなかなかないと思い参加しましたが、楽しそうな発表者の話を聞き、参加して良かったと思いました」という感想がありました。

